

私の幼稚園

—昔 噺 の 卷—

水 嶋 さ ゆ り

園長、時雄、時雄のお祖父さん、お祖母さん、紅梅の咲初めた鉢を園んで褒めてゐる。

時雄「咲いたよ、咲いた。」

園長「綺麗な花が。」

お祖父さん「ひご、ふた、三花。」

お祖母さん「梅が咲いたよ。」

時雄「おいで驚。」

園長「ホケキヨごお鳴き。」

時雄のお祖母さんのお噺

むかし〜天子様のお庭の紅梅の樹が枯れました。天子様は家來達に代りの梅の樹を植ゑるやうにお言附けになりました。家來達はあちらこちら捜して、やつこ美しい紅梅を見附けました。家來達は其のうちの一人、

「天子様へ此の梅の樹をお上げ申して下さい。」

と言ふに、其のうちの人が、

「喜んでお上げ申します。さうぞお持ち下さいませ。」

と言つて、歌を書いた紙を花の枝に結附けました。

家來達は其の梅の樹を掘探つて御殿のお庭へ運んで來ました。

「あゝ見事、見事。」

天子様は大層お喜びになりました。それから紙に書いてある歌を讀んで御覽になります。

此の梅はホケキヨのおうち。

ホウホケキヨウ。

と書いてありました。天子様は、

「や、此の梅は鶯のおうちか、鶯のおうちを奪つてしまつては可哀想だ。」

とおつしやつて、もこの處へお返しになりました。

時雄のお祖父さんのお囃

竹に雀は仙臺様よ、

一羽の雀がちつ、ちつ、ち

二羽の雀がちつ、ちつ、ち

三羽一緒がちつ、ちつ、ち。

仙臺様と言ふのはお殿様です。お殿様の子に鶴千代さまと言ふ坊ちゃんがありました。そして家來に千松と言ふ子供が
ました。鶴千代さまも千松も、食べる物が無くてお腹がぺこぺこになりました。

鶴千代さま「ママが食べたい。」

千松「わしもママが食べたい」

二人は泣きさうになりました。千松のお母さんが、

「鶴千代さま、今直にママを炊いて差上げませう。千松、雀の歌を歌つてお上げ。」

千松は「へこく」のお腹を耐えて、小さな手をたたいて、

一羽の雀の言ふこゝにや、言ふこゝにや、

ゆうべ貰うた萩の餅、萩の餅。

こ歌ひました。するこお庭の竹に居た親雀が、「ちつ、ちつ、ち。こ縁側へ飛んで来ました。千松はお母さんからお米を少し貰つて、縁側へ撒いてやりました。親雀が喜んで、「ちつ、ちつ、ち。こ鳴くき、竹に居た子雀が又飛んで来ました。二羽の雀がお米を食べるのを見て、鶴千代さまに千松が、

一羽の雀の言ふこゝにや、言ふこゝにや、

ゆうべ貰うた萩の餅、萩の餅。

こ歌ひました。雀が皆お米を食べてしまふこ、

鶴千代さま「ママはまだか。」

千松「早う、ママが食べたい。」

其の時千松のお母さんが、

「あゝあゝ、ママが出来ました。」

こ言つて、鶴千代さまに千松に湯氣のたつ眞白なおまんまを食べさせました。

なつきの雀がお庭の竹で

ちゅ、ちゅ、ちゅ。ちゅ、ちゅ、ちゅ。

ご楽しさうに歌ひました。

時雄のお嘸

お天たう様とお月様とが一緒にぎつか遠くの方へ遊びに行つておしまひになりました。それで晝も夜も眞暗になりました。

鳥がカア〜鳴きました。

馬がヒン〜なきました。

牛がモウ〜なきました。

犬がワン〜、豚がブウ〜、猿がキツ〜と騒ぎました。大勢の鳴く聲がお天たう様やお月様のお耳に聞えました。

お二人は大急ぎでお歸りになりました。一緒に竝んでおいでになるので、あまり明る過ぎて、鳥も馬も牛もまぶしくて眼があげられません。犬も豚も猿も皆眼がまつて、ころんでしまひました。

「これでは可哀想だ」

お二人はかう言つて、別々のおうちへお這入りになりました。そして晝間はお天たう様が照し、夜はお月様が出るやうになりました。それで鳥や獸は皆喜びました。

園長のお嘸

お猿拾つた柿の種

蟹が見つけた握飯。

あら、ら、ら、ら

お猿食べたい、握飯、

蟹をだまして取替ごっこ。

あら、ら、ら、ら。

桃栗三年柿八年、

梅はすい〜十三年。

あら、ら、ら、ら。

お猿ばく〜〜甘い柿、

蟹にぶつける澁い柿。

あら、ら、ら、ら。

猿蟹合戦大いくさ、

お猿ぺちやんこ蟹萬歳。

あら、ら、ら、ら。

猿蟹合戦でぺちやんこにされた猿は、蟹や白に、「ほ〜ん」ミ谷間へ投込まれてしまひました。谷川の水が猿の口へ這入つて猿は息を噴返しました。

「あゝ、ひびい目に遭つたものだ。もう蟹をかまふごころは止めよう。」

猿は谷間からやつみの事で這上つて山路にぐつたり寝てゐました。

する〜一人のお爺さんが山へ柴刈りに來ました。

お爺さん「おや〜、こんな處に猿が寝てゐるよ、可哀想に、ぺちやんこになつてゐるね。」

猿「お爺さん、お腹がぺこ〜です。何か食物を下さい。」

お爺さん「よし、握飯を上げよう、さあお上り。」

腰にさけてゐた袋の中からお辨當の握飯を一つ出して猿にやりました。猿は思はず握飯に飛附きました。そしてばかり
ご食へようとして、

「お爺さん、あなたに上げる柿の種がありません。」

ご心配さうに申しました。お爺さんは腰を伸して大笑して、

「心配しなさんな、わしは蟹でないからね。」

ご言つたので、猿は安心して握飯を食べました。そして

「お爺さん、お蔭で元氣になりました。」

ご言つて、お禮にお爺さんの柴刈のお手傳をしました。

夕方お爺さんは柴をぎつさり背負つてうちへ歸りました。うちではお婆さんが大きな桃を抱へてお爺さんの歸りを待つてゐました。

「お婆さん、今歸つたよ。」

「お爺さんかえ、待つてゐましたよ。ほら御覽、こんな大きな桃が流れて來ましたよ。」

「ひやあ、大きな桃だね、切つて食へよう。」

お爺さんお婆さん二人がかりですばつと切るに、桃がばんばん二つに割れて、

「おぎあーつ。」

と桃太郎が躍り出しました。

猿は此の話を聞いて喜びました。そして桃太郎の家來になつて鬼が島征伐のお供をしました。